

港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

特別展「\*Life with ネコ展」  
ネコの足跡山根 洋子  
(学芸員)

可愛らしいネコの写真や動画は、毎日のように SNS を通じて発信されています。このことから、現代の日本において、ネコと生活を共にする人がいかに多いかをうかがうことができますが、いつの時代からネコは人びとの身近に存在したのでしょうか。

縄文時代の遺跡からは野生のオオヤマネコの骨や、その歯や骨を利用した加工品が出土し、オオヤマネコが狩猟の対象であったことがわかっています。しかし、イエネコ、いわゆる「ネコ」は日本には生息しておらず、従来、仏教の伝来と共に、その経典を守るために渡来したと考えられていました。ところが、近年、イエネコ=ネコと思われる骨が弥生時代の環濠集落跡である長崎県吉岐市カラカミ遺跡から出土しました。この骨は放射性炭素年代測定の結果、紀元前2世紀頃の弥生時代のものであることが判明しています。仏教伝来は6世紀半ばとされているので、それよりも約800年も昔にネコが我々日本人のもとで暮らし始めた可能性が出てきたのです。

ところで、皆さんはコンクリートに付いたネコの足跡を見たことはないでしょうか。生乾きのコンクリートの上を、ネコが歩き、そのまま乾燥してしまったのです。実は、古墳時代や江戸時代の遺跡でも「足跡」が発見されています。ここで幾つご紹介しましょう。

平成19(2007)年、兵庫県姫路市見野古墳群6号墳から小動物の足跡が付いた須恵器の杯が見つかったと発表されました。この須恵器は6世紀末から7世紀初頭のもので、小動物というと、ネコ以外にイヌやタヌキ、キツネなどの可能性もあります。ネコとイヌ科の足跡を見分ける際には、形、サイズや縦横比なども考慮されますが、決め手の一つに爪痕の有無があるそうです。

イヌ科の動物は歩く時に爪を出します。一方、ネコは爪を収納して歩きます。見野古墳群6号墳から出土した須恵器に付いた足跡はどうでしょうか？

肉球のくぼみだけで、爪の痕跡は見えません。形やサイズなども含めた検討の結果ですが、爪の痕がないことも有力な根拠として、ネコの足跡である可能性が高いと指摘されています(丸山ほか 2011)。

見野古墳群6号墳出土  
須恵器杯  
(姫路市教育委員会蔵)

平成30(2018)年には福井県美浜町の興道寺遺跡でも足跡の付いた須恵器の杯が見つかりました。見野古墳群6号墳出土の須恵器と同時期のもので、こちらにも爪痕はなく、ネコの足跡と考えられます。爪痕が伴わずネコと思われる足跡は、他に、愛媛県湯築城跡出土の土師質土器の皿(16世紀)、新宿区内藤町遺跡出土の焼塩壺の蓋(18世紀)などにも見られます。乾燥しきれていない器物の上をうっかり歩いてしまうネコが、時代を越えて各地にいたのです。ただし、いずれもその生産地にいたネコの足跡ということになります。例えば新宿区内藤町遺跡から出土した焼塩壺の蓋の生産地は泉州、今の大阪府南西部ですので、江戸(東京)のネコではありません。

爪痕のあるイヌやタヌキなどの足跡が確認される遺物の出土例もあり、さまざまな動物が人びとの生活圏内に生息していたことがわかります。

特別展「\*Life with ネコ展」では、考古・歴史・美術資料などから、ネコと人びとの暮らし、そして、今年の干支であるネコ科のトラや、現在、愛玩動物の首位の座をネコと争うイヌにも焦点を当て、これらの動物と人びとの関わりの歴史を紹介します。

参考文献

丸山真史・馬場基・松井章「須恵器に残された動物の足跡」『姫路市見野古墳群発掘調査報告』(立命館大学文学部学芸員過程研究報告13) 立命館大学文学部 2011年



港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## 旗本花房家屋敷跡遺跡の黒曜石

平河内 毅  
(学芸員)

**皆**さんは黒曜石という石をご存知でしょうか。その名のとおり黒く輝く石で、マグマが地表付近で急冷されてできた天然のガラスのことです。この黒曜石は打撃を加えると規則的に割れるため、その性質を利用して大昔の人々はナイフや弓矢の先端の素材として重宝しました。日本には黒曜石の原産地が各地にあります。中でも最も多くの黒曜石を産出する地域のひとつに北海道の白滝しらたきという地域があります。白滝の黒曜石の埋蔵量は数十億トンとも言われ、東洋一の黒曜石原産地と呼ばれています。私が以前に白滝を訪れたときには露頭付近に黒曜石が散乱しており、山道を走る車のタイヤがパンクするのではないかと考えたほどです。

港区内でもいくつかの遺跡から黒曜石を素材とした石器が出土しており、中でも旗本花房家屋敷跡遺跡（六本木4丁目）からは後期旧石器時代の黒曜石資料64点が発掘され、これらの黒曜石の原産地を特定するために化学分析も行われています。黒曜石の欠片は、一見するとどれも同じ石に見えますが、実はその成分を比較することで、日本のどこで産出した黒曜石なのかを辿ることができます。ちなみに、蛍光X線分析という方法を用いると、黒曜石を破壊せずにその成分を計測することができます。そのため、遺跡から見つかった黒曜石製の石器を分析する際は、しばしばこの方法が選択されます。

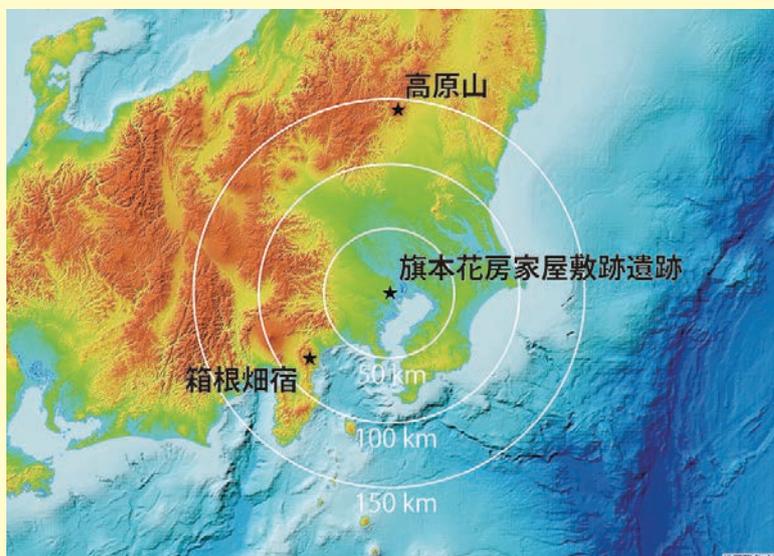
では、旗本花房家屋敷跡遺跡で発見された黒曜石はいったいどこ産地のものでしたのでしょうか。過去の分析結果によると、ほぼすべてが箱根畑宿産（神奈川県）の黒曜石であり、他に1点だけ高原山産（栃木県）を含むという結果でした。

確かに、箱根畑宿は港区から比較的近い原産地であることから、近傍の石材を利用するという感覚は現代人の我々でも理解しやすいと思います。ただ、他に比

べると近場というだけで、遺跡から箱根畑宿までは直線距離にして約80kmも離れています。計画的に移動していたとしても車も鉄道も無い時代に約80kmもの距離を移動するにはそれなりの期間を要したことでしょう。それほどに当時の人々にとって黒曜石は必要不可欠なものであり、継続的に石器の素材が手に入るかどうかは、狩りをする上での死活問題であったと考えられます。

一方で、1点だけ含まれていた高原山産の黒曜石の存在はどう理解すればよいのでしょうか。栃木県の高原山と旗本花房家屋敷跡遺跡は直線距離で約140kmも離れており、近場とは言えません。様々な理由が考えられますが、おそらく異なる地域の集団との交流によってもたらされたものとも考えられます。背景には婚姻関係などがあるのでしょうか。

このように、一か所の遺跡の調査成果だけでは大昔の人々の暮らしぶりを復元することは難しいですが、小さな石でもそのデータをつぶさに拾い上げてゆくことで、結果として、大昔の人々の足取りをつかむことができます。今後も港区内の発掘調査の成果が蓄積されてゆくことで、ユニークな地域史が復元されてゆくことが期待できます。



遺跡から黒曜石原産地までの距離（地理院タイルを加工して作成）